

まえがき

はじめに申し上げなければなりません。私は北野たけしさんに金を貸しています。五万三千元です。「何だ、それっばかりの金」と思う人があるかもしれませんが、貸したのは四十年も前の事です。当時二十代だった私にとっては、一か月の生活費に匹敵するほどの大金です。なぜ貸したかは本文を読んでください。

当時も今も、私はマジシャン（正式には手妻師^{てづまし}、日本の伝統奇術の演者）で、年の割には稼ぎのいいマジシャンでした。しかし、稼いでいたから金を貸したわけではありません。

松竹演芸場でたけしさんと出会って以来、私はたけしさんの才能にほれ込み、当時、数少ないたけしさんの理解者の一人となりました。当時は四面楚歌だったツービートを支援し、ツービートの普及協会会長を自ら任じていました。にもかかわらずその後、たけしさんは貸金を踏み倒し、後ろ足で砂をかけ、「けつ」と言って、肩をひくひくさせて去って行きました。

その後、たけしさんが有名になった後も、何度か顔を合わせる機会がありました。貸金も催促しましたが、すぐ返すよと言って、結局今日までうやむやです。

いや、正確にいうと、たけしさんは、返そうという気はあったようです。

二〇一四年、東スポ芸能大賞というたけしさんの選定する賞で、私は特別芸能賞というものを頂きました。私は、この東スポ芸能大賞がどれほど権威のある賞かは知りません。ただ、私と同時受賞した人は、元南アフリカ大統領ネルソン・マンデラさんの追悼式で、各国要人のスピーチをデタラメに手話通訳した人でしたから、きつと怪しい賞だと思っていました（インチキ手話通訳は当日欠席していました。当然だと思います）。

とにかく賞状と賞金が出るから来てくれと言われて、東京プリンスホテルのパーティー会場に行き、私はたけしさんから賞状を頂き、賞金の入ったのし袋を貰ったのですが、その時に、たけしさんは、

「これで昔の借りは勘弁してくれ」

と言いました。何と、たけしさんは借りた金を覚えていたのです。そうであるなら、北野たけしともあろう人が、すぐにでも返せる金を、なぜその日までうやむやにしていたの

でしょうか。しかし、いかにたけしさんに選んでもらった賞とは言え、東スポの賞金で何とかしてくれというのは筋が通りません。賞金は私の四十数年間にわたる奇術師としての成果として東京スポーツ新聞社から頂いたのです。それを自分の借金と一緒にするとは何事か。私はふつふつと怒りがこみ上げて来ました。「他人の禪ふんじで相撲を取るとは、とんでもない奴だ」——そう思うと私は、受賞の感想を求められたときに、賞金を握りしめて、「これで済んだと思うなよ」

と昔の東映の悪役、上田吉二郎が言いそうなセリフをマイクを通して口走っていました。この時私は決心しました。生涯「金返せ」を言ってやろう、と。

正直なところ、金はどうでもいいのです。今となつては返してもらっても、銀座で豪遊できるほどの金額でなし。高円寺の純情商店街で仲間と呑んで、一晩で消えてしまうような金です。それなら要りません。たけしさんの方も初めから返す気はないはずです。

だとするならば、たけしさんが私に何を期待しているのかと考えると、恐らく、わざと私に弱みを見せて、私から、世間に面白い話題を提供させようと考えているのでしょう。あの人は常にSとMが同居しているような人ですから、人に責め立てられ、自ら追い込まれて、窮余のリアクションを見せて、笑いを作るのが好きなのです。

よし、そうとわかれば、私は生涯たけしさんに貸した金をネタに、たけしさんを語ってやろうと決心しました。それで、この本の発刊に至ったのです。売れる前のたけしさんの生息は、今となつては謎の部分がたくさんあります。私しか知り得ない二十代のたけしさんの話は山ほどあります。ただし、今まではそれを語ることを躊躇ちゆうちよしていました。

なぜと問われるまでもありません。立派に成功した人の過去を語ることはその人に失礼だからです。どんなに偉大な人でも若いうちはおかしなことをするものです。ましてやたけしさんです。それをあげつらつては失礼です。しかし、あれから四十年が経ちました。国の公文書でも、三十年も経てば外に公表します。そうならそろそろたけしさんのことも表に出してもよいと思います。

拙著は決してたけしさんの輝かしき成功を貶おとしめるために書いたものではありません。何度も言いますが、私こそたけしさんの理解者の第一人者であり、全く売れていなかったたけしさんと、六年間、松竹演芸場の楽屋や、舞台を共にし、終わるといつも酒を飲んで過ごしてきたのです。そんな私がたけしさんを悪く書くはずがないでしょう。ヘークシヨイ。

この間の六年は何にも代えがたい充実の日々でした。なぜなら、あの北野たけしを独占

し、毎日一緒に酒が飲めたのですから。今思えば私の人生にこんな毎日があったことを幸せに思います。この場を借りて、たけしさんに感謝申し上げたい、と殊勝な言葉の一つも言いたいところですが、そう素直には頭を下げられません。貸した金以外にも数々の不義理をされたことを忘れることはできません。私だけではありません。どれほど多くの人がたけしさんに苦しめられたか。中には私の親父のように金が戻らないまま亡くなっていった芸人もいます。そうした芸人の鎮魂の意味も含めて、ここにたけちゃん出世物語の一節ひととせを語らせていただきます。

さあさあ、長口上ながこうじょうは芸うまの妨さまたげ、されば、四十年前の浅草松竹演芸場に皆様をお誘い申し上げましょう。演芸場に出演していた様々な芸人と、たけちゃんとが織りなすばあかばかしいお話、題しまして『たけちゃん、金返せ。』のお粗末。お時間まで、「よつ、新ちゃん たっぷり」。

二〇一八年八月

藤山新太郎

天才現る の巻



初めてたけちゃんに会ったのは昭和五十年、私が二十一の時でした。当時私はジュニア南といって、大学に通いながら舞台に立つマジシャンでした。名前の由来は、私の父親が南けんじといって、漫談をしていて、その倅せがれだからジュニア南です。親父は戦後すぐにスイングボーイズというコミックバンドを拵こしらえて、人気が出て、その後脱線ボーイズ、さらに漫談になりました。

なにおん、親父は戦争前から活動していた芸人ですから、浅草松竹演芸場では主ぬしのような存在で、出番があらうとなかろうと、毎日のように、演芸場の事務所か楽屋にたむろして、競馬の予想をしたり、若手や中堅の芸人相手に、麻雀やトランプ博打ばくちをして、若手のなけなしの小遣いをむしり取って酒代にしていました。親父のことは後で話します。

最初の出会いはたけちゃんではなく、相方のきよしさんでした。今度ツービートというコンビを組んで演芸場に出るというので、松竹演芸場に挨拶に来たのです。初出演の若手

は、事前に宣伝材料（写真、プロフィール、名刺の三点）を持って、住田課長に挨拶に行くのが決まりです。宣伝材料は、楽屋用語で宣材といいます。以前、宣材を持って来なさいと言われて、課長に粉の洗剤を持って行ったコンビがありました。それでも課長は有り難そうに洗剤を受け取り、そのコンビを出演させたのです。ルールはあつてないようなものです。

私が親父を探して楽屋に入つて行くと、きよしさんは楽屋で仲間の芸人と話をしていました。きよしさんは体が大きく、言葉は相当訛っていました。山形出身だそうです。パッと見た目には純朴な農村青年で、少し話をする面白そうな人なので、仲間の芸人と三人で喫茶店に出かけました。きよしさんは、

「初めは、フランス座で照明を手伝っていてさ、ストリップの合間に出てコントをしていたんだ。でも、このままじゃ芽が出ないと思ったから、エレベーターボーイをしていたたけしを誘って漫才コンビを組んだんだよ。そうしたらたけしの師匠の深見千三郎さんに、『コントをするならいいが、漫才するなら破門だ』と言われて、破門になっちゃったんだ

よ

「深見千三郎さんって誰なの」

「ストリップ劇場では看板の芸人だよ」

「それじゃフランス座に出られないでしょう」

「それで松鶴家千代若・千代菊師匠に頼って、漫才の弟子にもらったんだ」

「千代若師匠って古典漫才でしょう。きよさんのいく道とは違うんじゃないの」

「うん、でも、とりあえずどっかに入っていないと、先輩にいじめられるといけないから。」

それで田舎のホテルに出たり、田舎のストリップ小屋に出たり、田舎のお祭りに出たり」

「田舎ばかりだね」

「仕事ないからしょうがないよ」

「で、どんな漫才をするの」

「一方的に相方が喋りまくるんだ、面白いんだこれが。相方は天才だよ」

なんだかよくわからないけれども、「面白そうだから見てみたいと思いました。」

翌月演芸場に行くと、楽屋から漫才の、春風こうたさんが出て来て、

「ツীবート出るよ。面白いから一緒に見ようよ」

と言つて、演芸場の客席後ろの壁に並びました。見るとほかの漫才も並んでいます。

つまりみんなして、一本目に出るツীবートを待っているのです。こんなことは今までになかったことです。大概一本目の漫才なんて、観客をだらすだけだからして、期待して演芸場に入ってきた客をしみじみ後悔させるような、見るに堪えない漫才が多いのですから。ここで初めてツীবートの漫才を見ました。初めから終しまいまでたけちゃんちゃんが喋りまくつて、自分で筋を運んで、自分で落ととして、きよしさんは時々「やめなさい」「よしなさい」と言うだけで、漫才というよりも漫談に近いものでした。しかし、面白いことは無類です。その時のネタはこんな感じでした。

たけし「どうも、ツীবートです。今日のお客さんの状況は、スズメの学校といいま
す」

きよし「どうして」

た「じーじーばーばーじーばーばーといつて」

き「よしなさい」

た「最近顔色いいじゃないか」

き「まあな」

た「親でも死んだか」

き「よしなさい、親が死んで喜ぶわけないだろ」

た「今は学歴社会つていいですけどね、でも本当は学歴なんて関係ないですよ。こいつの兄さんなんか中学出ですよ。でも真面目ですから、今は立派なやくざですよ」

き「よしなさいどこが真面目なんだ」

た「腕にまじめつて彫つてあるんですから」

き「彫つてどうすんだ」

か「今は立派に更生しています」

き「いいよ、もう」

た「姉さんなんか中学校中退ですけどねえ、今は立派なストリッパーですよ」

き「それは俺のかみさんだよ」

た「で、こいつの生まれが山形ですよ」

き「いいところですよ、山形」

た「山形っていつても並みの山形じゃないんですよ。駅からバスに乗って二時間、船に乗って二時間。あと槍持って走るんですよ」

き「よしなさい」

た「飛行機見るとみんな手で手を合わせて拝むんですから」

き「いい加減にしなさい」

た「みんな裸で、男なんか前に竹筒はめてるんですよ」

き「よしなさいって」

た「こいつの親父なんか元人食い人種だったんですから」

き「いい加減にしなさい」

た「おじいさんなんか山形で初めて立って歩いたですよ」

き「そんなわけないだろ」

こんな調子で、つながりのない話が延々と続きます。ストーリーなんて全くない。たけちゃんの一方的な機関銃のような喋りが続くだけ。その喋りもお世辞にもうまい喋りではなく、口がもごもごして、滑舌が悪い。芸の味わいなんで全くない。ボケと突っ込みの区別もない。そもそもきよしさんがボケない。突っ込まない。これは漫才とはいえませんが。話すそばから観客が笑って、笑った後にはネタが宙に消え去ってゆく。実に即物的です。

しかもたけちゃんは喋っている間中、右の肩をこきこき動かして、顔もびくびく引きつらせて落ち着かない。相当精神的に不安定な人のように見えます。だけでも面白い。理屈抜きで面白い。いつ果てるとも知れない小話の連続で、いくらでも聞いていたくなります。正直言って、私はこれまで松竹演芸場で面白い漫才を聴いたことがありませんでした。

関西の漫才には面白い人がいますが、関東の漫才は、巧さは感じて、型にはまっていて、行儀が良く、声に出して笑うほど面白かったことはありませんでした。ところが、ツーンと背が曲げて笑ってしまう箇所が何度もありました。演芸場の一本目の漫才の、しかも初舞台でこれほど面白いというのは初体験でした。

これは何としても仲間になりたい。早速地下の楽屋に降りていくと、たけちゃんは大部

屋の真ん中で、裸で汗を拭きながら、デレーツとして休んでいました。この時たけちゃん
は二十八歳くらいだったと思います。ラクダのシャツを着て、年の割に老けて、およそ若
手漫才に見えませんが、今見た漫才がとても面白かったと話すと、たけちゃんは素直に喜び
の表情を浮かべ、色々と話を始めたので、私は早速喫茶店に誘いました。この先六年にわ
たるたけちゃんのお付き合いは、こうして始まりました。

喫茶店でのたけちゃんは舞台と同じく、面白い話をぼつぼつ小声で喋ります。今までの
くさんの芸人とお茶を飲みましたが、こんな面白い人は初めてでした。関西の漫才のこと、
東京の落語家のこと、今の芸人も昔の芸人も実によく知っています。笑いに関する限り何
でも好きなようです。だが、向かい合ってもほとんど目を合わせません。

たけちゃんはいつでも伏し目がちで、ぼそぼそと話をします。時折、自分の笑いを確か
めるかのように前を向いて、ちらりと私の顔を見ますが、相手が満足していると知ると、
またすぐに下を向いてしまいます。シャイなのです。そのうち、別の芸人が話題を出して、
そっちの話が盛り上がってくると、今度は、野良猫のように縮こまり、寂しそうな顔をし

て聞き役に回ります。「ずいぶん屈折した心根の人なんだなあ」と思いました。

私は、一遍会っただけでたけちゃんの頭の回転の良さにはまってしまいました。すべてを突き抜けて畏敬の念すら感じました。これ以後、三日に一度くらい演芸場に行っては、たけちゃんとお茶を飲むのが楽しみになりました。

2

私は親父に、ツービートという漫才がめっちゃ面白いと話をしました。今までの漫才とは格段の違いだと言うと、親父もそれなら見てみようとその気になりました。私が三度目にたけちゃんに会った時にはたけちゃんは私の親父が南けんじであることを知っていました。

「親父さんって面白いよなあ。こないだ漫談聞いて笑っちゃったよ。『死に物狂いで白線にタッチ』、可笑しかったなあ。ジュニアは親父さんと一緒に暮らしているの」

❖ 著者略歴

藤山新太郎（ふじやま・しんたろう）

昭和二年一月一日東京生まれ。

一一歳で初舞台。以来、マジシャンとして活動する。

文化庁芸術祭賞を受賞（昭和六年・平成五年・平成一〇年。うち平成一〇年は芸術祭大賞）。
伝統的な古典奇術「手妻」を継承し、蝶のたはむれ、水芸等を今に残している。

著書に、『タネも仕掛けもございません——昭和の奇術師たち』角川学芸出版、

二〇一〇年。『そもそもプロマジシャンというものは』東京堂出版、二〇一〇年。『手妻
のはなし——失われた日本の奇術』新潮社、二〇〇九年、など。

たけちゃん、金返せ。

浅草松竹演芸場の青春

2018年9月8日 初版第一刷印刷

2018年9月13日 初版第一刷発行

著 者 —— 藤山新太郎

発行者 —— 森下紀夫

発行所 —— 論 創 社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03(3264)5254 fax. 03(3264)5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装 幀 —— 宗利淳一

装画・挿絵 —— カズ・カタヤマ

編集・組版 —— 永井佳乃

印刷・製本 —— 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1740-8 ©2018 Fujiyama Shintaro Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。